

長崎県感染症発生動向調査速報

平成24年第49週 平成24年12月3日（月）～平成24年12月9日（日）

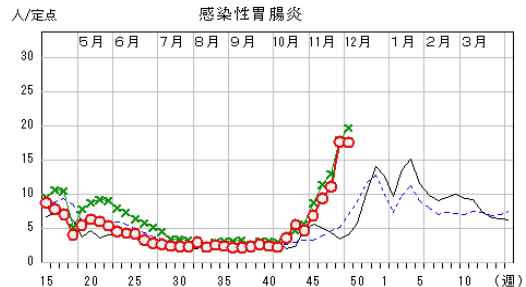
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

(1) 感染性胃腸炎

第49週の報告数は772人で、前週より4人少なく、定点当たりの報告数は17.55であった。

年齢別では、1歳（102人）、10～14歳（92人）、2歳（87人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県南保健所（26.00）、県北保健所（25.33）、西彼保健所（21.25）が多かった。

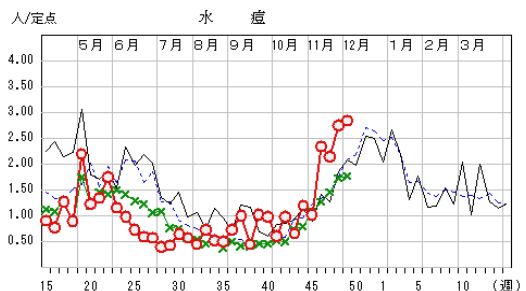


(2) 水痘

第49週の報告数は125人で、前週より4人多く、定点当たりの報告数は2.84であった。

年齢別では、2歳（36人）、1歳（25人）、3歳（21人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県北保健所（9.67）、県南保健所（6.40）、佐世保市保健所（4.0）が多かった。

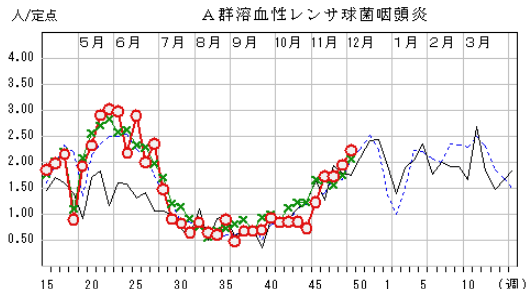


(3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第49週の報告数は98人で、前週より12人多く、定点当たりの報告数は2.23であった。

年齢別では、4歳（14人）、5歳（13人）、7歳（11人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、西彼保健所（7.50）、五島保健所（3.75）、長崎市保健所（3.10）が多かった。



○ 当年(長崎県) — 前年(長崎県)
× 当年(全国) - - 前年(全国)

☆トピックス・季節情報

【感染性胃腸炎】

長崎県における第49週の報告数は772人で、前週より4人減少して、定点当たりの人数は17.55となりましたが、全国定点当たりの人数（19.62）よりは低値でした。杵岐地区を除く県下全域から報告があり、中でも県南地区（26.0）、県北地区（25.33）、西彼地区（21.25）、五島地区（20.0）は警報レベル「20」以上の高値を示しており、上五島以外の地区で10.0を超えています。

例年10月から11月にかけて流行の立ち上がりが見られ、12月中旬頃がピークとなる傾向にあることから11月13日には、厚生労働省より、「感染性胃腸炎の流行に伴うノロウイルスの予防啓発について」の通知が出されたところですが、本疾患による患者数の全国的な増加が、同時期では過去10年で平成18年に次ぐ高い水準であることから、11月27日に同省から「感染性胃腸炎の流行状況を踏まえたノロウイルスの一層の予防啓発について」の通知が出されました。本格的な流行期となっていますので、十分な注意が必要です。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はノロウイルス、ノロウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについては2011年7月にワクチンが製造承認され、2012年7月には国内2製品目が発売されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

(参考：厚労省HP <http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/03.html#link01>)

【水痘】

長崎県における第49週の報告数は、前週より4人増加して125人でした。定点当たりの人数は2.84で、全国定点当たりの人数(1.78)を上回っています。上五島地区を除く県下全域から報告があり、中でも注意報レベルの「4」を上回る県北地区では9.67、県南地区では6.40、佐世保地区では4.0と高値を示している地域も増加しています。

この疾病は、例年、冬場に患者数が増加する傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。

水痘は水疱瘡(みずぼうそう)とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染あるいは水泡の内溶液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

【A群溶血レンサ球菌咽頭炎】

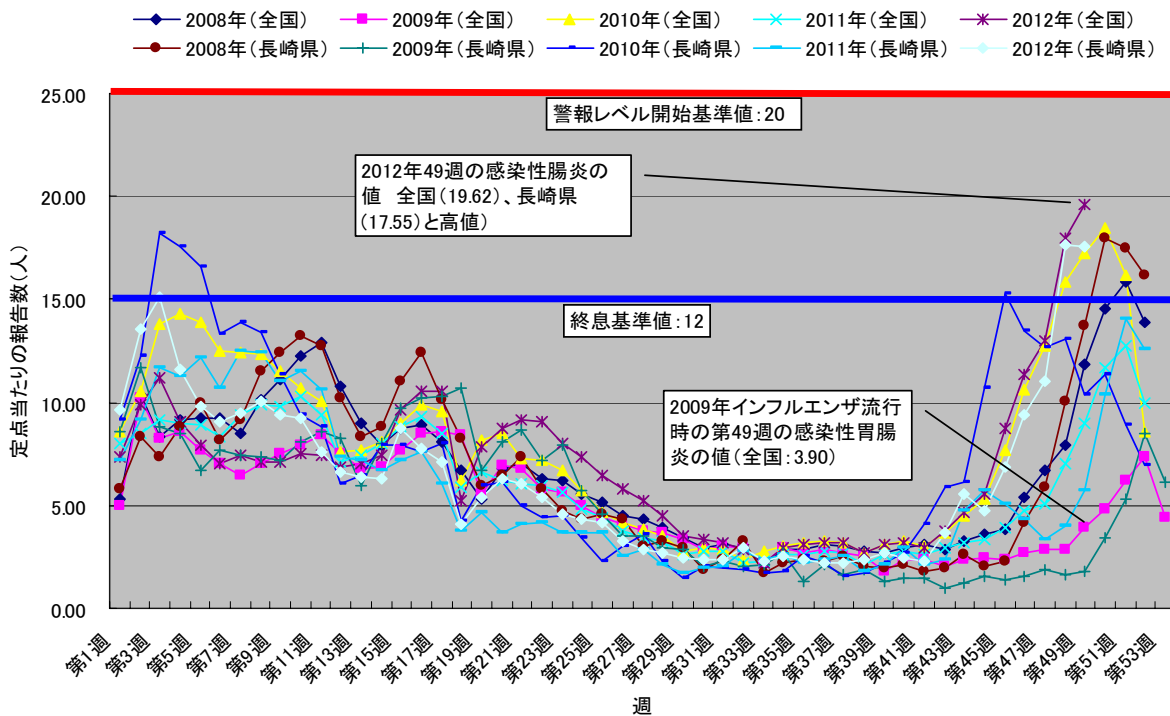
長崎県における第49週の報告数は前週より12人増加して98人で、定点当たりの人数は2.23でした。壱岐地区を除く県下全域から報告があり、特に西彼地区では定点当たりの人数が7.50と警報レベルの「8」に迫る値を示しています。例年、冬にむけて報告数が増加傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。

本感染症の好発年齢は5~15歳で、鼻汁・唾液中のA群溶血性レンサ球菌の飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1~4日で、突然の発熱(高熱)、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により多くは1~2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

☆トピックス：**感染性胃腸炎に気をつけましょう。**

感染性胃腸炎の患者報告数が急増しています。ニュース等でも取り上げられていますが、今年は特にノロウイルスによる感染性胃腸炎の流行が懸念されています。

本県においても患者数が増加傾向で推移しており、全国的な流行をみせています。2009年の新型インフルエンザ流行の際、手洗いの積極的な励行やマスクの着用により、感染性胃腸炎の流行が極端に抑制されたことから、手洗い、うがいは、簡便かつ有効な手段であると考えられますので、積極的な感染防止に努めましょう。



感染性胃腸炎における過去5年間の推移

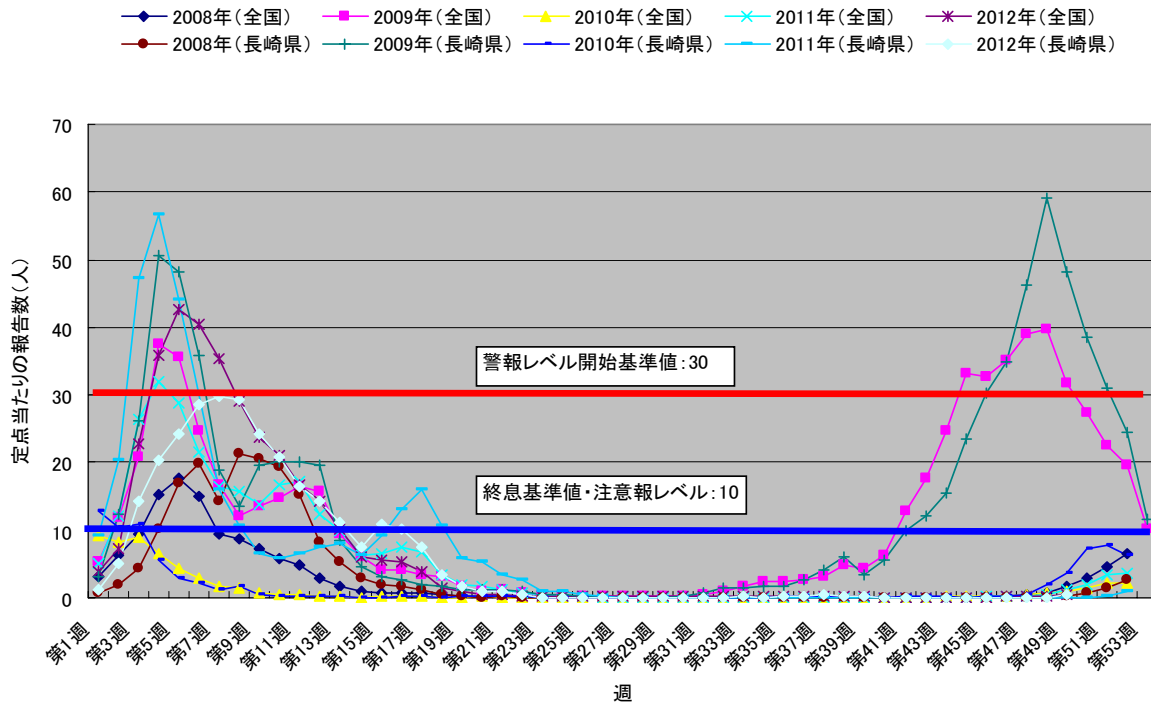
☆トピックス：**インフルエンザに気をつけましょう。**

12月に入り、冬の装いが深まってきました。

例年、本県でのインフルエンザの流行は冬休みをはさんで翌年の第1週から患者数の増加が認められていますが、本年は、12月4日に2012/13シーズンにおいて、県北地区の小学校1校で、最初のインフルエンザ(疑い)の発生に係る臨時休業措置がとられました。

本県の第49週の定点当たりの報告数は0.41と全国定点当たり報告数(0.57)と比べ低値ですが、県北地区においては、定点当たりの報告数が前週では1.0でしたが、49週では5.50に急増しています。また、長崎地区で4件、佐世保地区で3件の報告が上がっています。

ワクチン接種による予防はもとより、手洗いの励行、外出先から帰宅した際のうがい、人ごみに入る際はマスクの着用などで、積極的な感染防止に努めましょう。



インフルエンザにおける過去5年間の推移

☆トピックス：風疹に気をつけましょう。

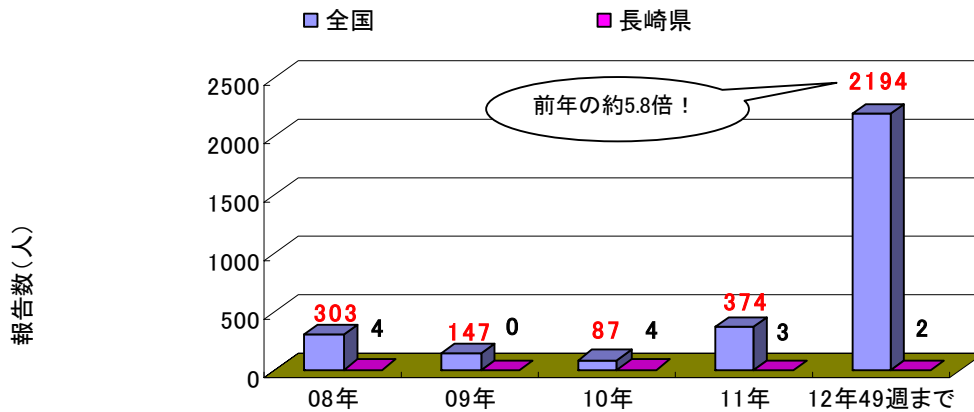
風疹（三日はしか）の報告数が首都圏を中心に過去5年間に於いて最も急激に増加しています。その内訳は20～40歳代の男性が全体の約6割を占めており、風疹ワクチンの接種対象が1994年まで中学生の女子に限られたため、この年齢層には免疫がない男性が多数存在していることが今回の流行に大きく影響しているようです。

第1週から49週までの間、本県では第35週に1件、第41週に1件（30代前半の帰省者）、計2件の発生報告がありました。全国報告数は前週（2093人）より57人増加して2194人となり、昨年の5倍以上の総患者報告数となっていますが、報告数の増加率は緩やかに転じてきているようです。

風疹はせきやくしゃみなどから感染し、通常は発疹や発熱が起きますが軽微な症状で経過し、重篤化することはほとんどありませんが、妊娠初期3ヶ月までに感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など（先天性風疹症候群：CRS）を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風疹やCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦にうつすことのないよう、配偶者や周囲の人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチンの接種を実施することが重要です。

本県での報告数は少ないですが、今後の風疹の動向に注視して十分に注意しましょう。



報告年(2008～2012年第49週まで)

過去5年間の全国と長崎県の風疹の報告数の推移

